

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：平成21年度～平成22年度

課題番号：21830032

研究課題名 失業者の心理の理解に基づいた心理的援助に関する研究

研究課題名 A study on the psychological support based on the understanding of the unemployed people's psychological distress

研究代表者

高橋 美保 (TAKAHASHI MIHO)

東京大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：10549281

研究成果の概要（和文）：

本研究では、失業者のメンタルヘルスに影響する要因として、失業者に対して抱かれているスティグマ意識に着目して研究を行った。その結果、7因子からなる失業者に対するスティグマ尺度を作成した。さらに、失業者に対するスティグマ意識の違いを属性によって分析した結果、失業者との接触が乏しいと忌避感が高まることが示唆された。また、失業者を対象とした研究では、失業者の抑うつ感が高いこと、コミュニティが乏しいことが示唆され、失業者の罪悪感の高さは抑うつに影響することが示唆された。さらに、失業者に対するスティグマ意識は、社会人のデータでは国による違いが認められた。また、その関連要因として、働くことについての意識の違いや、コミュニティ意識があると考えられた。失業者に対する援助を行う際にも、経済的な支援だけでなく、失業者への意識といった個人や社会へのアプローチが必要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

In this study, the stigma for the unemployed people was featured to examine the factor which was thought to be related to the mental health of them. A Scale to measure the stigma for the unemployed was developed which was consisted of seven factors. It was suggested that the less contact with the unemployed could be related to the feeling to evade the unemployed. Moreover, the results showed that the depressive feeling among the unemployed was higher than the employed, and they didn't have much feeling to have a community in their society. It was also suggested that there seemed to be a difference in the level of stigma for the unemployed by country, and it occurred due to the difference of the mindset of working or the sense of community. It was suggested that not only economical support but also the approach to the stigma in individual or in the society should be taken into consideration to support for the unemployed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,070,000	321,000	1,391,000
22年度	960,000	288,000	1,248,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,030,000	609,000	2,639,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：失業者、心理、心理的援助

## 1. 研究開始当初の背景

2008年9月のリーマン・ブラザーズの経営破綻以来、世界の経済情勢は大きく混乱し、企業のリストラや倒産が世界規模で起こっている。それに伴い、失業問題も深刻化しており、2008年年末より日本の完全失業率は上昇傾向にある。特に、雇用主や事業都合による非自発的離職が自発的離職を上回っており、やむなく失業に至るケースが増えているといえよう。

筆者は1990年代後半に深刻化した失業問題について、心理的なストレスが大きい事態であり、失業者個人に対する何がしかの心理的な援助が必要であると考えた。しかし、当時、海外には1930年代から膨大な量の失業研究の蓄積があるのに対して、日本では失業についての心理学的な検討はほとんどなされていなかった。1990年代前半までは、日本の失業率は低水準であったという社会的背景と、失業者を対象にまとめたデータを取りにくい上、デリケートな内容となるなど調査を実施する難しさもあったのではないかと推察される。

しかし、1990年代後半以降の失業率の悪化と、それに呼応するかのようになり1998年以降より高水準で推移している自殺率の悪化から、失業問題への心理的な取り組みは急務であると考え、研究に着手した。当時国内には十分な知見がなかったことから、まずは海外の知見を整理することから始めたところ、現代日本の失業には海外の失業研究では説明しきれない特有の難しさがあるように感じるようになり、時代性や地域性を視野に入れた研究をする必要があると考えた。また、今後日本で心理学的なアプローチによる失業研究を行うに際して、現場の実態に合った実践的かつ社会に役に立つ研究をするということが極めて重要と考えられた。

このような考えに基づき、筆者は1990年代後半より、リストラ失業者やその家族あるいは中高年の失業経験者を対象に、失業の心理を理解する研究を重ねてきた(高橋・久田, 2002、久田・高橋, 2003、高橋, 2008c, d)。さらに、近年では、失業者への心理的援助の在り方を検討するために、公共職業安定所の一般職業紹介経験職員を対象とする研究を実施してきた(高橋, 2008a, b)。このような中、昨年より先述のように社会情勢が悪化し、非正規雇用の雇い止めや正社員のリストラといった形で、失業問題が再び大きな社会的問題として取り上げられるようになった。失業しても再就職が難しい雇用情勢において、失業者は再就職の見通しも立たないままやり場のない不安感を抱いているのが現状と思われる。このような社会情勢においてこそ、社会に役立つ失業研究を実施する必要があ

る。

## 2. 研究の目的

なお、近年失業者に注目する研究も少しずつ見られるようになってきたが(坂爪, 2003など)、失業者の心理の理解と具体的な援助を志向する包括的な研究はまだない。特に、これまでの研究では、失業者として生きることの生き辛さについて、詳細な検討はなされていない。そこで、本研究では、失業者の生き辛さやメンタルヘルスに影響する要因として、失業者に対するスティグマ意識に注目し、失業者に対するスティグマ意識を測る尺度を作成するとともに、それをを用いた実態調査を行うとともに、関連要因を検討する。さらに、それをを用いた国際比較調査を行い、各国における特異性と普遍性を明らかにする。それにより、失業者の生き辛さを理解することで、今後の支援策を検討することとする。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の4つの研究を実施した。研究1では、失業者に対するスティグマ意識尺度を作成した。研究2では失業者に対するスティグマ意識の実態とその関連要因に関する検討を行った。研究3は失業者自身のスティグマ意識と精神健康の実態調査を行った。研究4は失業者に対する意識の国際比較調査を行った。

### <研究1>

失業者に対するスティグマについての文献研究を行った結果、日本では失業に関するスティグマ研究は行われていないことが明らかになった。そこで、学生、社会人などを対象に失業者に対する意識の自由記述調査を実施、そのデータをKJ法で分析して、失業者に対する様々な意識から成る尺度を作成した。それを元に量的な予備調査を実施して失業者に対するスティグマ意識尺度を作成し、最終的に本調査を実施して尺度を完成した。

### <研究2>

研究1で作成した失業者に対するスティグマ意識尺度を用いて、一般の人を対象に、失業者に対するスティグマ意識の実態とその関連要因に関する検討を行った。具体的には、集団主義意識や、コミュニティ意識、キャリア意識などに注目し、量的解析を行った。

### <研究3>

失業者を対象に、スティグマ意識尺度を用いた量的調査を実施し、失業者自身の精神健康の実態把握調査を行うとともに、スティグマ意識と精神健康度の関連について検討した。

### <研究4>

失業者に対する意識の国際比較調査とし

て、韓国の社会人、中国の学生、カナダの学生を対象とした調査を実施し、失業者に対するスティグマ意識の違いを検討した。

#### 4. 研究成果

##### <研究1>

予備調査で抽出された9つのカテゴリーを元に、失業者に対する様々な意識から成る尺度を作成して量的な予備調査を実施し、特にスティグマ的な要素が強い因子を抽出して失業者に対するスティグマ尺度を作成した。学生、社会人を対象とした本調査を実施した結果、7因子から成る尺度を作成した。

表1 失業者へのスティグマ尺度の因子  
(平均、標準偏差、 $\alpha$ 係数)

F1 失業者へのスティグマ意識(M=2.00, SD=.55, $\alpha=.87$ )
F2 失業者に対する非難(M=2.09, SD=.59, $\alpha=.82$ )
F3 失業者に対する忌避(M=1.93, SD=.67, $\alpha=.75$ )
F4 失業者が持つべき罪悪感(M=2.44, SD=.72, $\alpha=.71$ )
F5 失業者が抱くべき被害感(M=2.49, SD=.57, $\alpha=.71$ )
F6 優雅な失業生活への批判(M=1.85, SD=.61, $\alpha=.75$ )
F7 失業者自身の生活不安(M=3.49, SD=.51, $\alpha=.70$ )

##### <研究2>

日本人の社会人を対象に、社会人の属性によるスティグマ意識の違いを分析した。その結果、身近に失業者、及び失業経験者がいない人、失業者と直接話したことがない人、失業者の相談に乗ったことがない人は、失業者に対する忌避感が高いことが明らかになった。また、自分自身が失業をするのではないかと思いついた経験はスティグマ意識に有意な影響は認められなかったが、自分自身が失業した経験については、失業経験がない人の方が失業者の被害感強いというイメージを持ちやすい傾向が示唆された。性別や、現在の仕事の雇用形態による違いは見られなかった。

##### <研究3>

失業者が失業者に対して抱くスティグマ意識とメンタルヘルス、及び関連要因としてコミュニティ感覚との関係について検討した。その結果、失業者は就労者よりコミュニティ感覚が乏しく、抑うつ傾向が高いことが示された。また、失業者は失業について罪悪感を持つほど抑うつ感が高まりやすい傾向がある

表1 失業者と就労者のt検定の結果

	失業者		就労者		t値
	M	SD	M	SD	
精神健康度					
不安・抑うつ	2.56	0.65	2.27	0.65	2.02*
活動障害	2.14	0.60	2.03	0.50	
精神健康度	2.34	0.55	2.15	0.49	
失業者へのスティグマ意識					
失業者に対する忌避	1.56	0.74	1.62	0.59	
失業者自身の罪悪感	2.32	0.85	2.12	0.71	
失業者自身の生活不安	3.44	0.47	3.38	0.58	
コミュニティ感覚					
メンバーシップ	2.30	0.66	2.82	0.80	2.99***
影響力	1.73	0.67	2.21	0.70	3.03***
統合とニーズの充足	2.25	0.47	2.85	0.68	4.15***
情緒的結合	2.63	0.94	3.33	0.74	3.69***
コミュニティ感覚	2.23	0.54	2.79	0.58	4.29***

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

こと、40代以上は抑うつ的になりやすい可能性が示唆された。

##### <研究4>

はじめに、日本と中国、韓国のデータを用いて、スティグマ意識の関連要因となりうる集団意識やコミュニティ感覚の検討を行った。その結果、コミュニティ感覚はメンタルヘルスにポジティブに作用する可能性が示唆された。

さらに、学生が失業者に対して抱くスティグマ意識について国際比較を行ったところ、日本、中国、カナダに有意差は認められなかった。ただし、スティグマ意識はキャリア観によって異なることが示唆された。

一方、社会人が失業者に対して抱くスティグマ意識について韓国と日本の国際比較調査を行ったところ、スティグマ意識は日本よりも韓国の方が強く、韓国ではコミュニティ意識の高さが失業者へのスティグマ意識をむしろ高める可能性が示唆された。

Table1 失業者に対するスティグマ尺度の下位尺度得点の平均(標準偏差)と検定の結果

	日本	韓国	t値
1.スティグマ(10項目)	1.81(0.43)	2.08(0.60)	t(153)=3.14*
2.非難(6項目)	2.06(0.55)	2.14(0.63)	t(155)=0.81
3.忌避(4項目)	1.85(0.53)	1.87(0.70)	t(154)=0.14
4.罪悪感(3項目)	2.13(0.57)	2.40(0.62)	t(154)=2.85*
5.被害者(4項目)	2.44(0.55)	2.28(0.62)	t(155)=1.65
6.優雅批判(3項目)	1.82(0.56)	2.08(0.66)	t(154)=2.7**
7.生活不安(3項目)	3.59(0.49)	2.80(0.64)	t(155)=7.4***

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

以上より、本研究では、失業者のメンタルヘルスに影響する可能性のある失業者に対するスティグマ意識に注目し、その構造を明らかにした。また、その関連要因として、属性、コミュニティ意識、キャリア意識など様々な視点からスティグマ意識がどのような属性や意識と関係があるのかが示唆された。

特に失業者との接触の有無が失業者へのスティグマ意識に影響することが示唆された。また、スティグマ意識には、キャリア意識やコミュニティ意識が関係しており、特にコミュニティ意識は失業者のコミュニティにおける生き辛さに影響することが示唆された。また、失業者へのスティグマ意識は、その内容によって国による違いがあることが示唆された。さらに、失業者に対する研究では、失業者の抑うつ意識は失業者自身が抱く罪悪感に関係があることが示唆された。

以上より、失業者支援に際しては、失業者に対するスティグマ意識をどのように軽減していくのかを、キャリア意識から問い直すとともに、援助に際してはコミュニティ意識が失業者をサポートする要因として働くよ

うな社会に対する働きかけが必要と考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 高橋美保、森田慎一郎、石津和子、集団主義とコミュニティ意識がメンタルヘルスに及ぼす影響—日・中・韓の国際比較を通して、東京大学大学院教育学研究科紀要、査読無、50、2011、159—180
- ② 高橋美保、森田慎一郎、石津和子、失業者へのスティグマに関する研究の外観と今後の展望—心理的援助に向けて、東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、査読無、33、2010、56—63
- ③ 石津和子、高橋美保、森田慎一郎、失業者に対する意識—失業者との関係性に着目したKJ法による分析、駒沢女子大学研究紀要、査読無、17、2010、23—37

[学会発表] (計5件)

- ① 高橋美保、森田慎一郎、石津和子、失業者のメンタルヘルス—コミュニティで生きる人として、第17回日本行動医学会学術集会、2011. 3. 11、東京大学
- ② 石津和子、森田慎一郎、高橋美保、失業者に対する意識(1)—KJ法によるイメージの分類、日本心理学会第74回大会、2010. 9. 21、大阪大学
- ③ 高橋美保、石津和子、森田慎一郎、失業者に対する意識(2)—失業者への意識を探るための尺度の作成、日本心理学会第74回大会、2010. 9. 21、大阪大学
- ④ 森田慎一郎、高橋美保、石津和子、失業者に対する意識(3)—キャリア意識との関連を中心に、日本心理学会第74回大会、2010. 9. 21、大阪大学
- ⑤ 高橋美保、森田慎一郎、石津和子、失業者に対する意識—失業者との関係性及び距離に注目して、日本コミュニティ心理学会第13回、2010. 7. 18、立教大学

[図書] (計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 美保 (TAKAHASHI MIHO)

東京大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：10549281